

留学生の声

塾内在籍高校・学年(派遣時)	志木高等学校 2年
留学先高校名	Winchester College
留学期間	2018年 9月から 2019年 7月まで

どのようなことを期待して渡航しましたか？

ソフトスキルの面では、アイデンティティとEQ（こころの知能指数）の形成、向上に役立つ経験をしたいと思っていました。未知の世界で、意味や目的を考えずにできる限り多様な経験をすることがその達成に大きな力になると考えました。

同時に、将来の目標、方向性を定めることもこの留学の目的でした。高校入学時には、経済や経営に関わることが自分に向いているだろうと何となく思っていたのですが、その思考がただの表面的な取り繕いではないのか、自分の気づかない深いところには違った可能性があるのではないか、という疑念が湧き上がっていました。それを解決するために、派遣先でのインプットに対する自分の直観や感情に素直に向き合い、隠された可能性を探し出すことに1年を費やそうと決めました。

これらの目的を持った私にとって、具体的な目標を課されず、自由に時間を過ごさせてくれるこの派遣留学制度は絶好の機会でした。

また、ハードスキルについては、“Well-rounded”（バランスの良い・全方位的）な人を目標とするリベラルアーツ的な授業で日本では学べない教科を履修することを一番楽しみにしていました。さらに、使い古された表現ではありますが、異文化体験を通して柔軟な思考力を手に入れたいと考えていました。

留学を振り返って

私の派遣留学は、期待を超えた素晴らしいものになりました。

一度も来たことのない異国の街、60人以上の学友と共に過ごすボーディングハウス、射撃など日本では考えられない体験ができる施設、これらは沢山の新鮮な体験を与えてくれたのです。また、慣れない言語の中で生活することで、直観的な感性も鋭くなった気がします。駅が近い学校の立地は、週末や休みの日に遠くの街を旅する機会を与えてくれました。これらは、いわゆる「自分探し」に、アイデンティティやEQを育てるのに大きく役立ちました。

美術の授業や、週に何度か行われる特別レクチャーは、私に建築という新しい可能性を教えてくれました。一貫校の通常のカリキュラムでは美術を深く学習することはできません。しかし、ウィンチェスターでは3教科の授業に集中できます。技術だけでなく、哲学、背景の思想や歴史、作品分析、実験的制作や視覚言語の開発といった非常に高度なことを教えて頂きました。美術専用の棟もあり、ほとんど初心者の私でも、興味と熱意さえあれば能力を開発することができました。また、英国の工業遺産を知るにつれ、エンジニアリングも面白いと思うようになりました。これらは、建築士という新たな可能性として形になったのです。

さらに、この1年間を通して、今までは全く気にも留めなかったことに興味を持つようにもなりました。Divisionの授業ではスペインの歴史を扱い、哲学では神の存在について論じました。キリスト教などの新たな考え方にも触れました。新たな休みの日に旅行をしていれば、新しい料理に出会い、美しい街と自然、そしてその歴史に心を動かされました。単純に、珍しいものを見たことでより多くのものが目に付くようになっただけでも知れませんが、留学前の人生経験が乏しかっただけだとも言えるでしょう。それでも、この1年を終えて、間違いなく私の心の風景は豊かになりました。留学前に持っていた単純な先入観を超えて、小さなものごと一つひとつにより純粋な形で惹かれるようになりました。美術を主に、授業での学びは街々で出会ったものごとに興味を持たせ、また理解を助け、深めてくれました。より多くのものにより深く興味を持てる、繊細な感性を教えてくれたのです。

もちろん、この留学はハードスキルの開発にも役立ちました。多彩な知識が身に付き、コンフォートゾーンの外に出て、全く違う場所にインスピレーションを求めることができるようになりました。

ウィンチェスターカレッジの先生方、そして施設は私をよくサポートしてくれました。特に先述した美術棟や特別レクチャーは素晴らしく、射撃や心理学まで幅広い部活があることも嬉しいものでした。

短期・長期休暇はどのように過ごしましたか？

ウィンチェスターに滞在しているときは、カーディフなど少し遠くの街に行ったり、ロンドンの博物館を見

慶應義塾一貫教育校派遣留学制度

に行ったりしました。また、ガーディアン会社の方をお願いしてカンタベリーやヨークなど遠くの街にホームステイをして、周辺の街を見に行き、スケッチをしたり博物館を訪れたりしていました。クリスマスは友人の家にお邪魔して過ごしました。

春休みにはウィンチェスターカレッジの美術の奨学金制度、Drew Travel で奨学金を勝ち取り、友人とイタリアに行きました。また、自分で計画してチャンネル諸島とフランス、スコットランドを旅行しました。

授業について

美術については、先述の通り、哲学的な側面にも触れる、日本と比べてかなりレベルの高い授業でした。それ以外の哲学、経済、Division では、幅広く面白い題材を扱いましたが、特に理解に困るような難しい内容はありませんでした。履修科目が少ない分、教科ごとの学習内容は多く、より詳細に学ぶことになります。クラスの規模は科目によりますが私の経験では多い経済で 15 人弱、少ない美術で 5 人です。ディスカッションとまではいきませんが、日本の学校よりも生徒が発言することが求められているようです。また、より深い学びを得るためには、どの教科でも授業とは別に生徒が主体となって興味を追求することが推奨されています。美術では自主的に美術館に行くなどして研究をすることが期待されていました。

今後の派遣留学生へのアドバイス

実用的なレベルで言えば、多少日本と留学先の国の歴史について知っておくこと、社会情勢を抑えておくことは、周囲の会話についていくことや、授業をよりよく理解するのに役に立つと思います。しかし、より大切なのは目的や心構えを決めていくことだと考えています。派遣留学制度から特に目標が与えられていない分、自主的に行動しないと無駄に時間を過ごすだけになる可能性もあります。

もし具体的に研究したいこと、極めたいスポーツなどがあれば、それをどういったレベルまで追求するのか、どのようにそれを達成するのか詳しく計画を立ててください。留学先の先生方と素晴らしい設備が全力でサポートしてくれるでしょう。

そして、特別に具体的なことが無い、決めかねている、もしくは具体的な目標とは別に新たな可能性を探りたいという場合は、今は興味がなくても留学先で試せることはすべて試してみよう、という心構えを持って、自分の世界を、コンフォートゾーンを大きく広げることを目指してみてください。たとえばはじめは役に立たないように見えることでも、後で意味が見出せるようになることもあります。途中で具体的に追求したいものが見つかるかもしれません。留学までには、何となくでも魅力を感じる分野の入門書を読むなどするといいいでしょう。私は社会学、心理学、農業、建築、生物学などの本を読みました。これらは全部が直接役に立ったわけではありませんが、留学先で新しいことに挑戦する後押しになったと思います。この派遣留学制度のように、具体的な課題もなく、いわゆる「自分探し」のモラトリアムの 1 年を、新しい出会いをたくさん提供してくれる海外の環境で与えられるなど滅多にないことだと、私の少ない人生経験からでも感じます。これを未知の可能性を、自分の「好き」を知り、新たなスタートを切る機会にしてください。

どちらに当てはまるとしても、自分の本当の気持ちに素直に従って時間を使えば、派遣留学の 1 年間は必ずや人生の糧になるものだと確信しています。



以上